

## 社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

### 第5回若者研究会

#### 1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

#### 2. 研究会基本情報

日時： 2021年12月16日（日） 13:00～16:40

場所： オンライン会議

テーマ： 「集団間関係、対立と連帯」について

報告者：

1) 徳山奈帆子（京都大学）

レビュー「霊長類学キーワード・レビュー」

研究発表「ボノボの集団間における攻撃・親和・協力関係」

2) 藤井真一（国立民族学博物館）

レビュー「人類学キーワード・レビュー」

研究発表「ヒト社会における暴力と共生——ソロモン諸島の事例から」

#### 3. キーワードのレビューと概説

霊長類学キーワード・レビュー

（徳山奈帆子）

単独型の種を除く霊長類種の集団は、基本的に安定したメンバーシップを持ち、集団内に個体間関係を持つ。集団間には食物や繁殖相手を巡る競合が生じ、集団間関係は多くの種において排他的である。とはいえバリエーションも大きく、複数集団が一か所で共存し異なる集団の個体間で親和的交渉が観察される種から、集団間で殺しが見られる種まで様々である（e.g, Pisor & Surbeck 2018, Belle et al. 2020）。

このような集団間関係の違いは、集団間の競合の強さ(共存のコスト)、共存によるメリット、そして対立によるリスクのバランスにより決定されると考えられている。例えば利用する食物資源が果実のように局所的に存在し、ある場所の防衛価値が高い場合、その種はナワバリをもち、集団間には敵対的關係が形成される。一方で草本のように均一かつ多量に存在する資源を利用する場合は、資源防衛により得るメリットが、ナワバリ保持のコストや対立によるリスクを下回り、集団間の寛容性が高くなる傾向がみられる。同じ種や個体群内であっても、環境や状況により集団間関係が変化することもある。ボノボにおいては、資源量が非常に豊富になる時期に集団間の寛容・親和性が高まる(Sakamaki et al. 2018)。また、テングザルにおいては、ウンピョウによる捕食の可能性が高まる時期に、川べりに複数集団が凝集する(Matsuda et al. 2010)。

集団間の対立関係は集団内の協力・親和(連帯)を短期的、あるいは進化的タイムスパンにおいて強めると考えられている。例えば、チンパンジーは遊動域の周辺をパトロールする際に集団内の凝集性を高め(Samuni et al. 2020)、ゴリラは敵対的な集団の出会いが起こった直後に高頻度で毛づくろいを行う(Mirville et al. 2020)。また、集団間の競合が高い種においてメス間の毛づくろいがより多く見られることも分かっている(Majolo et al. 2016)。しかし、テナガザルは集団の出会いの直後に集団内の毛づくろい頻度が減少し(Yi et al. 2010)、飼育オマキザルに他集団個体の音声を聞かせると集団内の攻撃交渉の頻度が上がる(Polizzi et al. 2012)といった研究結果もあり、必ずしも他集団との対立が集団内の連帯に結び付くとは限らない。

### 質疑応答:

● 霊長類の集団間関係について、親和・協力/共存/回避/攻撃というのは種によって決まるのか、それとも状況によって変化するということなのか。

→ チンパンジーのように異なる集団が共存できない種もあるが、オスを含まない集団は共存しうる。ボノボでも親和・協力がみられる一方で回避や攻撃的な出会いになることもあり、状況に応じ、集団間関係にふれ幅がみられる。

### 人類学キーワード・レビュー

(藤井真一)

社会文化人類学において「集団間関係」といった場合、(1)生物種や(2)民族集団、(3)出自集団、さらには婚姻を通じて二つ以上の出自集団が結合した(4)親族集団を単位とするさまざまな集団間関係が考えられる。

また、集団間関係における「対立」を表現するときにも、社会文化人類学ではさまざまな言葉遣いがありうる。たとえば、「紛争 (conflict)」という語が指し示すものも研究者によって異なり、暴力的衝突や物理的暴力を伴う意味合いだけでなく、心理的葛藤のような非暴力的ニュアンスを含んだ用例もある。この点で、戦争 (war) とは異なり、取り扱いに困る用語・概念である。

さらに、「連帯」は個体間の互助的な結合を表すキーワードであると考えられるが、婚姻連帯やアソシエーション、共同体 (コミュニティ) のように調査者が観察可能な互助的結合の様態はさまざまである。たとえば、社会文化人類学における社会関係の理論には、出自理論と縁組理論がある。前者は、出自を同じくする (血縁がある) という属性を前提として集団を推論し、その属性が異なる集団を「異なる出自集団」とみなして外婚制度等を説明しようとする。一方、後者は出自集団が違うという関係に焦点を当てて集団の生成を説明する理論であり、婚姻による集団間の連帯や同盟関係に焦点を当てるものである。

\* \* \*

暴力 (violence) や攻撃性 (aggression) をめぐって、社会文化人類学では、それらが人間本性に根差すものか否か (nature vs. nurture) という論争が長く続いている [フリードほか編 1968; Otto et al. (eds) 2006; Fry (ed.) 2014 など]。特に、「社会化 (socialization)」のプロセスの中で攻撃性の抑制がいかに学習されるかを論じる研究が多い [Sponsel & Gregor (eds) 1994; Kemp & Fry (eds) 2004; Fry 2007 など]。2000年代に入ると、冷戦終結後に地域紛争や民族紛争が頻発する状況において、暴力や戦争を扱う研究が多数出現するようになった [Schmidt & Schroder (eds) 2001; Aijmer & Abbink (eds) 2000; Stewart & Strathern 2002 など]。ただし、戦争を行なう社会であっても戦争は特別な事件であり、平和な期間の方が圧倒的に長い。こうした社会では報復闘争 (blood feud) の単位であるクランと、クランを横断する個人的関係のバランスによって戦争と平和の平衡状態が保たれていると論じられてきた [Gluckman 1956; 佐川 2011 など]。

総じて、社会文化人類学研究では平和的な関係に力点が置かれてきたといえる (外婚の規則によって女性の集団内自家消費を避け、二つの集団が姻族・親族の関係で結ばれることが平和維持のメカニズムだとする研究や、交換が平和的な信頼関係を構築するとする研究、それらを発展させたレヴィ＝ストロースの婚姻連帯理論など)。財や女性の交換が、それらを略奪する戦争の代替的行為であり、集団を社会的に統合するものと考えられてきたわけである。こうした機能主義的・構造主義的な「戦争」の説明と同様に、「暴力」もまた機能主義的・象徴主義的な説明が試みられてきた (供犠や割礼など非日常的局面における暴力)。

一方、戦争が (1) 国家という単一権力や支配-従属関係の創出に抗して集団を分散させ続けるものであること [クラストル 2003 (1977)] や (2) 集団アイデンティティを創出する手段であること [Harrison 1993] を指摘する研究もある。21世紀にはいると、これまで主流であった「集団」から「個人」へと分析の視点を移す暴力・戦争研究も出てきている [佐川 2011 など]。

\* \* \*

「連帯」に関連する「ともに生き、ともに在ること」を表す概念として、共生・共存・共生などの用語が用いられる。木村大治[1996,2003]は、「共生」にはつねに、それがあつた種の「良きこと」であり「望ましいもの」であるといった感覚が付随しているように思われる。それに対して「共生」は、「無視する」とか「争う」といった状態をも含む、より中性的なものである」と考えている。たしかに、「共存」や「共生」という語は、分野を越えてさまざまな用いられ方をする術語であり、たとえば「自然と人間の共生」や「動物異種他個体と人間との共存」といった用法がある。つまり、異なる性質を持つと考えられる二種の何かが近接的かつ同所的に存在しており、しかも二種間で相互に影響関係を及ぼし合う可能性があることを前提として、「いかに異種間での同所的空間構成が生産的で建設的な互惠関係を成立させうるのか」という課題を考えるときに、「共生」や「共存」という言葉が用いられる傾向にある。

「共生」という術語は「異なる種の生物が互いに助け合いながら生きていく」ことを指す「共棲」をルーツとする。共生 (conviviality) と共棲 (symbiosis) はいずれも「キョウセイ」と呼ぶが、生態学や動物行動学における異種他個体の混群や縄張りをめぐる研究で「共棲」が用いられる傾向がある。両者の共通点は「生活空間を共有して暮らす」ということである。共生という語も、かつては、社会的マイノリティが主流社会に取り込まれ、まぎれて見えなくなること (同化状態) を含意していたのに対し、ある社会の中でマジョリティもマイノリティも生活様式や価値観を損なわずに同所的に共生すること (統合状態) を指すもの、さらに相互関係が進展していく過程でマジョリティもマイノリティもともに変化し、新たな価値が生み出されることに注目するものへと変遷してきている。

## 参考文献

- 木村大治 (1996) 「ボンゴンドにおける共生感覚」菅原和孝、野村雅一 (編) 『コミュニケーションとしての身体』 (叢書・身体と文化 2)、316-344 頁、大修館書店。
- (2003) 『共生感覚』 京都大学学術出版会。
- クラストル、ピエール (2003 [1977]) 『暴力の考古学—未開社会における戦争』 毬藻充 (訳)、現代企画室。
- 佐川徹 (2011) 『暴力と歓待の民族誌—東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』 昭和堂。
- フリード、M、M・ハリス、R・マーフィー (編) (1968) 『戦争の研究—武力紛争と攻撃性の人類学的分析』 大林太良、蒲生正男、渡辺直経 (訳)、ペリかん社。
- Aijmer, Göran & Jon Abbink (eds) (2000) *Meanings of Violence: A Cross Cultural Perspective*. Oxford & New York: Berg.
- Fry, Douglas P. (2006) *The Human Potential for Peace: An Anthropological Challenge to Assumptions about War and Violence*. Oxford: Oxford University Press.
- Fry, Douglas P. (ed.) (2014) *War, Peace, and Human Nature: The Convergence of*

- Evolutionary and Cultural Views*. Oxford: Oxford University.
- Gluckman, Max (1956) *Custom and Conflict in Africa*. Oxford: Blackwell.
- Harrison, Simon (1993) *The Mask of War*. Manchester & New York: Manchester University Press.
- Kemp, Graham & Douglas P. Fry (eds) (2004) *Keeping the Peace: Conflict Resolution and Peaceful Societies Around the World*. New York & London: Routledge.
- Otto, Ton, Henrik Thrane & Helle Vandkilde (2006) *Warfare and Society: Archaeological and Social Anthropological Perspectives*. Langelandsgade: Aarhus University Press.
- Schmidt, Bettina E. & Indo W. Schröder (eds) (2001) *Anthropology of Violence and Conflict*. London & New York: Routledge.
- Sponsel, Leslie & Thomas Gregor (eds) (1994) *The Anthropology of Peace and Nonviolence*. Boulder & London: Lynne Rienner Rienner.
- Stewart, Pamela J. & Andrew Strathern (eds) (2002) *Violence: Theory and Ethnography*. London & New York: Continuum.

## 総合討論：

### <攻撃性の発現を抑制するメカニズム>

- 社会化プロセスのなかで、サルではいかに攻撃性が抑制されるのか。
  - 順位形成過程で、低順位の個体は何度も攻撃行動を抑制されることで攻撃性を示さなくなる。チンパンジーではメスは抵抗しないため、オスはメスに攻撃性を示しつづける。ボノボの場合は、メスのほうがオスより相対的に順位が高い。チンパンジーと同様に、思春期ごろになるとオスが攻撃性を示しはじめるが、ボノボではメス同士が協力し、その若いオスを攻撃する。その結果、オスが学習し、メスに対する攻撃性を示さなくなる。
- 文化人類学の方の発表では「紛争 (conflict)」、「暴力 (violence)」などの語を使用していた。霊長類学の発表の方で使用されていた「攻撃」という語は英語でどう訳すのか。“violence”という語は使用するのか。
  - 霊長類学では、基本的に攻撃は、“aggression”や“attack”、または具体的な行動“chase”などで表現する。主に致死性の攻撃に対して“violence”という言葉を使用することがある。ボノボでは致死性の攻撃があまりみられないので、“violence”という言葉はほとんど使用しない。一方で、チンパンジーを研究している人はチンパンジーの“violence”がどのように進化したのかという文脈で使用する。

### <資源と集団間関係>

- 集団間闘争については、人間では利用できる資源を獲得するための技術の発展などとも

関連している。サブサハラ以南の焼畑農耕民がどのようにバントウ・エキスパンションという形で、移動していったのかという議論がある。人口の飽和で対立が生まれ分裂を繰り返しながら、焼き畑という技術とともに新しい場所に移動していった。

→ マウンテンゴリラでは、個体数が増え、資源を奪い合うようになると、集団間関係が苛烈になり、それまでみられなかった集団間の殺しもみられるようになったそうだ。サルでも資源の急激な変化で社会が変わることはある。技術については、サルで考えるには難しいかもしれない。

→ フランス・ドゥ・ヴァールの研究で、個体密度が攻撃性に与える影響について検討したものがあつた。チンパンジーとアカゲザルでは、密度が高くなつたとしても、けんかは増加しなかつた。ストレスレベルは上がるが、仲なおり行動をし、うまく互いの攻撃性を緩和させていた。

### <集団意識について>

#### ● サルに集団意識はあるのか

→ 集団で土地などを防衛する行動がみられたら集団意識があるのかなと思う。ボノボは集団がまじりあうが、集団内と外で協力的行動などの交渉は異なる。また、2つの集団がまじりあつた後、再び元の集団メンバーにわかれ移動していく。

#### ● サルでは他の群れに移籍した個体の帰属意識はどうなつているのか。また、人間のように元の集団に戻ることはあるのか。

→ チンパンジーの場合は、思春期ごろに群れを移籍する。移籍し子を産んだ後は一生その群れから動かない。チンパンジーの集団間の出会いで、移籍したメスが元の群れのメンバーと出会う事例を私は観察したことがない。しばらく集団から離れていた、若いメスが戻ることはある。帰属意識というよりは、周りの個体がどのようにふるまうかによって判断する。補足であるが、チンパンジーのメスは、基本的には生まれた集団から出るが、自集団に残るメスもある (Matsumoto *et al.*, 2021)。

→ ボノボの場合も思春期ごろにメスは群れをでていく。元の群れと出会うこともあるが、元の群れのメンバーとそれほど仲良くするわけでもない。母親がいたとしても、ときどき毛づくろいをする程度である。群れ同士で大喧嘩があつた際に、過去にいた群れよりも、現在所属している群れの個体に加勢していた。帰属意識が切り替わつていのではないだろうか。出戻りは観察していない。他の群れを数週間訪問していた若いメスが戻ってくることはあるが、拒絶されることはなかつた。

#### ● ニホンザルではオスが群れからでていくが、オスの帰属意識はどうなつているのか。

→ ニホンザルのオスが出戻つたところを私はみたことがない。前に所属していた群れと出会う場合には、現在帰属している群れに加勢する。複数の群れで観察されるオスがいたので、もしかしたらそのオスはどの群れにも帰属意識があつたのかもしれない。共在と共存の在り方が個体によっては異なる可能性もある。

### <共在や共存について>

- 共在、共生、共存のあり方は、霊長類学においてもそれぞれ種や集団や個体で異なる。共在=共存もあるし、共在と共存が異なる場合もあるかもしれない。
  - 人間は同じマンションに住み、ほとんど知り合いではなくとも、平和的に一緒にいられる。これは人間の特徴なのか、サルでもそのようなことはあるのか。
  - 大きな休息集団(通称、さるだんご)をつくることで有名な、寛容性が高いとされている小豆島のニホンザルは、群れ全体の個体数が多く全員が知り合いというわけではないだろう。1つの集団として共在しているが、みんな同じようにつきあっているわけではない。「共存」というわけではないのかもしれない。
- 人類学において、共在や共存など言葉の意味のきりわけはされているのか。
  - レビューをして感じたが、人により言葉使いが異なる気がする。

### <集団間での食物レパートリーの差について>

- 集団を移籍したチンパンジーが、元の集団で行っていた採食行動をしなくなったという例があった。水のなかの藻を食べていた個体が、他の集団に移籍すると、その行動をしなくなった。逆に、これまでレモンを食べていなかった個体がレモンを食べる集団に移籍するとレモンを食べるようになった。「文化」とよんでよいのかはわからないが、集団でしていることを一緒にやることで帰属意識が芽生えてくるのかもしれない。
  - ボノボでは狩猟するのは主に群れを出ていくメスであるのに、なぜか集団で狩猟の対象が決まっている。移籍したメスはその集団で狩猟しているものを狩るようになり、元の集団で狩っていたものを獲らなくなるようだ。
  - ニホンザルで、ホオノキの葉食べが、特定の集団から別の集団に広がっていったことがある。集団間を移動するオスを通じて、他集団のメスへ広がったのではないかと考えている。
- 人間では、集団に新しく人が入ってきてから、食物レパートリーが増えるというような事例はあるのか。
  - ヘビを食べる集団にヘビを食べない集団(バテツ)の人が婚姻し入った際には、「自分はバテツだからヘビは食べない」と言っていた。逆に、ヘビを食べる集団の人が婚姻し、バテツの集団に入ってきた際、その人はそこまで積極的にはヘビを食べようとはしなかった。
  - 人間は調理する。サルは生のものを食べられるため、食物レパートリーを柔軟に広げやすいのではないかと。

## 4. 研究発表

### 「ボノボの集団間における攻撃・親和・協力関係」

(徳山奈帆子)

ヒトにおける集団間関係、特に「戦争」の起源を考える上で、しばしばチンパンジーの集団間関係との比較が行われてきた。チンパンジーにおいて集団同士は非常に敵対的であることが知られており、特にオス同士は強い敵対関係にあり、徒党を組んで行動圏の境界をパトロールし、多数頭で協力して他集団の個体を殺すこともある。このようなチンパンジーの集団間の激しい敵対関係は、自集団が持つ繁殖相手や採食場所といった資源を守るための行動として適応的であるということが明らかになってきている。しかし、チンパンジーと同じくヒトと最も近縁な類人猿であるボノボは、チンパンジーとは大きく異なる集団間関係を持つ。ボノボの集団同士の行動圏は大きく重複しており、集団同士が混ざって数時間から数日の間一緒に過ごすことがある。攻撃的交渉も観察されるが、集団間の殺しは見られず、異なる集団の個体同士の毛づくろいや遊びなど、親和的な行動も観察される。

本研究では、あるボノボ個体が自集団個体と他集団個体双方との交渉が可能な状況において、どちらの個体をより多く親和的交渉相手に選択するかを検討した。このような状況において、自集団よりも他集団個体をより親和的交渉相手に選択する傾向が見られれば、ボノボは他集団個体と「積極的に」親和・協力的社会関係を形成しているといえる。逆に、自集団個体をより選択するようであれば、集団間に高い寛容性をもつボノボにおいても、自集団個体との協力・親和（連帯）がより重要であると考えられる。ボノボの長期調査が行われているルオー学術保護区（ワソバ）では、4集団のボノボの観察が可能である。そのうち遊動域が他の3集団と重複するPE集団のボノボにおいて、他集団と出会ったときの個体の行動データを収集した。親和的交渉として、毛づくろいと性的交渉（交尾、メス間の性器こすり行動）に注目して分析を行った。

結果として、PE集団のメスは、自集団メスよりも他集団メスを毛づくろい相手としてより選択していた。また、メス間の同性間性的交渉である性器こすり行動についても、自集団メスよりも他集団メスをより交渉相手に選択する傾向があった。PE集団のオスは、自集団メスよりも他集団メスを交尾相手として選択していた。しかし、PE集団のオスは他集団のオス/メスを自集団のオス/メスよりも毛づくろい相手に選択する傾向はなかった。

異なる集団のメス同士が積極的に毛づくろいや性器こすり行動といった親和的交渉を行っていることは、ボノボのメスが親和・協力ネットワークを集団外に広げようとする傾向を持つことを示している。オスにおいては、毛づくろい相手として他集団メス・オスをより選択する傾向は見られなかった。とはいえ、他集団個体を強く避ける傾向もみられなかった。これは、異なる集団のオス同士に激しい敵対関係が存在するチンパンジーとははっきりと異なる傾向である。さらに、交尾については他集団メスに対する積極性が見られ、繁殖相手

を増やそうとする行動が見られた。

本研究では、集団間親和的交渉への積極性に雌雄差があることが明らかになった。メスにとって、他集団メスとの親和的関係形成には、協力パートナーの獲得や息子の繁殖などの利益があり、それが集団の出会いによるコストを上回っていると推測できる。一方オスにとっては、集団の出会いは繁殖相手を増やすチャンスであるものの、メスを巡る他集団オスとの競合も存在する。オスは集団が出会っている間、他集団個体との親和的交渉によって攻撃交渉の激化の防止などの利益が得られる一方、自集団個体との親和的交渉により集団内の「連帯」も確認する必要もあり、ジレンマが存在するのかもしれない。

### 質疑応答：

● オスは他集団のメスを選択して交尾するという話だったが、その時に交尾したメスがその後移籍してくることはあるのか。

→ ボノボの場合は、生殖が始まる前の段階、平均年齢 8 歳くらいのワカメスしか移籍しない。最初に子供を産むのは 10~12 歳なので、まだ生殖可能な年齢の個体は移籍してこない。そのような若いメスとオスが交尾することはあって、そのメスが後に移籍してくることはあるが、大体のメスは移籍しない。

● オランウータンとか他の類人猿の場合を考えると、思春期くらいの若い個体が他集団に興味を持つことが多いと思う。ボノボの場合は集団間接触の時に、オトナの個体が積極的なのか、それとも思春期とか若い個体がより積極的なのか。

→ 思春期の若いメスもそうだが、基本的にはメス全体が行き、オスはその後ろにいる傾向にある。どちらが積極的かという若い個体は積極的かもしれないが、もう少し詳しく分析する必要がある。個性みたいなものも関わってきそう。

● ボノボは集団間の遊動域の重なりがかなり大きいということだったが、歴史的に昔から遊動域の重なりが大きかったのか。

→ チンパンジーとボノボの共通祖先がどうだったかというのは難しい。ボノボとチンパンジーが分岐した当てもチンパンジーは広い地域に分布していたと考えられていて、そちらの方が祖先系に近いのかもしれないが、その時の環境も分からないし証拠はない。

● 集団間の遊動域の重なりが大きいと他集団個体との接触確率が増えるので、そう考えるとお互いに攻撃交渉の方が増えるのか。長く遊動域が重なり続けてきた蓄積の結果としてお互いに攻撃しあうのではなくて、あまり襲わないように進化してきたのかなという気がした。

→ ゴリラも遊動域の重なりが大きいですが、チンパンジーに比べると攻撃の頻度は低い。集団間関係が敵対的だと遊動域が重ならないようになると考えられている。例えば、排他的な縄張りみたいなものは境界がはっきりしてくる。チンパンジーでは集団間関係が

敵対的で排他的なので、遊動域が重ならないということになる。

### 「ヒト社会における暴力と共生——ソロモン諸島の事例から」

(藤井真一)

本報告では、(1) 平和の人類学と総称される研究群の到達点と課題を概観し、(2) ソロモン諸島の「民族紛争」に焦点を当てながら、集団間関係(特に暴力と共生の問題)を取り上げた。

1980年代頃から登場してきた「平和の人類学」は、(1) 平和を戦争や暴力の欠如態としてではなく、平和状態が内包する力動性に注目するとともに、(2) 平和と暴力とを連続的な社会的プロセスと捉え、両者の動的な相互関係の解明を目指している。本報告では、戦争も贈与交換も他者との関係がなければ行ないえない社会的相互行為であるという両者の連続性に注目し、20世紀末に生じたソロモン諸島の「民族紛争」を取り上げて、平和と紛争との動的な関係を検討すべく贈与交換に着目しつつ、紛争現象に注目したとき周辺視野に映り込む平和的な日常生活を考察した。

ソロモン諸島は比較的大きな6つの島から成る9つの州と、総計100近い民族=言語集団から構成されている。「民族紛争」は、過去数十年にわたって首都を擁するガダルカナル島へと移住してきたマライタ島出身者(その子孫を含め、ここでは「マライタ系住民」と記す)とガダルカナル島民との間の潜在的な対立が武力衝突として顕在化した。当初はガダルカナル側武装集団によるマライタ系住民の暴力的かつ一方的な排斥行動がみられ、国内総人口の約1割が国内避難を余儀なくされた(ただし、そのうち約半数は戦場となったガダルカナル島内におけるガダルカナル島民の避難であった)。報告者の調査地であるガダルカナル島北東部は、紛争以前に特に大勢のマライタ系住民が暮らしていたこともあり、ほとんどが首都ホニアラやマライタ島へ避難した。また、当該地域に暮らしていたガダルカナル島民もまた、その多くが強制移住や自主避難等により居住地を離れなければならなくなった。

紛争渦中にあっても当該地域に留まり続けたごく一部のマライタ系住民や、当該地域で紛争への積極的関与を回避したガダルカナル島民の事例から、贈与交換を伴う紛争回避の生存戦略を明らかにした(平和と紛争の共時的関係の解明)。とりわけ、贈与交換の当事者(贈与者と受贈者)とは別に、第三者としての「仲介者」の存在だけでなく、贈与儀礼の証言者として機能する観衆という第三者の重要性を指摘した。また、太平洋の近隣諸国から構成された治安部隊の駐留により紛争が収束したのちにも頻繁に行なわれている贈与財の授受を伴う和解儀礼について、ソロモン諸島の伝統的な紛争処理であるコンペンセーションの要求・支払いと関連付けながら考察した(平和と紛争の通時的関係の解明)。ここでは、懲罰的・応報的な紛争処理と異なる修復的な紛争処理として近年注目されている真実和解委員会の取り組みが、ソロモン諸島の文化的規範に照らして共生の実現に十分な効果を発

揮できなかった理由を考察し、伝統的な紛争処理であるコンペンセーションに対する新たな解釈を示した。

平和と紛争との共時的関係においても通時的関係においても、贈与交換がきわめて重要な意味を持っている。これは、贈与交換が集団間関係に変化をもたらす力動性の源泉として、集団間関係の構築や修復といった「操作」を行なう行為だからだと考えられる。日常生活の中で絶え間なく行なわれている些細なやり取りが、それ自体として集団間関係を操作する行為でもあり、瑣末にも見える行為によって暴力の発現や敵対意識の顕在化を妨げつつ、人びとの日常生活の中に平和を生成し、集団の共生を実現しようとしているのだといえよう。

### 質疑応答：

- 民族紛争の和解の際に贈られる貝殻のお金(貝貨)は価値があるのか。それとも、豚のほうが、和解の際には価値があるのか。
  - 貝貨はソロモン諸島のなかでランガラングの人々しか生産しない。ランガラングの人々はサンゴを積み重ねて形成された人口の島で生活しており、畑仕事ができない。結婚式でやりとりされる貝のかざりなどを加工し他の民族に売り、芋などを購入している。貝貨1本で、日本円換算で1万5千円ぐらいである。サツマイモ一山で、40円ぐらい。貝貨より生きた豚のほうが価値は低いと思う。紛争解決のために、価値あるものを交換している。
- ソロモン諸島の人々は仲介役になにかものを渡すのか。それとも当事者のみでもののやりとりをするのか。
  - ものやりとりは当事者のみである。もめごとをうまくとります人には名誉が与えられる。儀礼の場でもののやりとりをした後は、「蒸し返してはいけない」という文化的規範がある。そのため、蒸し返されないように、人の集まりのなかで、問題を解決する様子を見せる。
- 武力集団から距離をおくというのが大多数なのか。闘争せず、「相手を回避する」というのが、サルではよくある。
  - 武力集団から距離をおく人々が圧倒的多数である。

### 総合討論：

#### <紛争解決方法の集団差について>

- 地域ごとに紛争の解決方法が異なる。どういう理由(歴史や生態学的な要因)でそのちがいが生じるのか。財産の持ち方などで紛争解決の仕方に影響があるのか。チンパンジーとボノボの社会性の差は食物環境のちがいが影響したという説がある。
  - 生業形態の差が人間関係(社会構造)に影響をあたえ、他の集団との関係の築き方や

土地との関係の在り方に差が生じることは知られている。

●なぜガダルカナル島の人々は、マライタ島出身者の移民を紛争の標的にしたのか。標的にした/された人々の間で生業の差はあったのか。

→労働移民としてガダルカナル島にやってきたマライタ島の人々は、どん欲に金を稼ぐため、ガダルカナル島の人々から「雇用機会が奪われた」などの憎しみやねたみを向けられていた。生業のちがいに差はない。

●ソロモン諸島はビクマン社会といわれている。政治的な権力と経済的な権力が一致しないことを志向する理念をもつのが、ビクマンのモデルである。経済と政治が一致するようなものができるとう不和や不平が生まれる。今回の研究事例は、平等性と階層性の対立のようなものか。

→そうである。

### <集団間での仲なおり>

●集団間での仲なおりはあるのか。

→ボノボでは集団間で闘争があった際には集団間の個体同士で仲なおり行動をする。仲なおりしなかった場合、メスはそのことを覚えているようだ。例えば、メスが他集団のオスに追いかけていたことがあり、1年後にその集団と再会した際、そのメスがそのオスを追いかけていた。仲なおりをしないとしこりは残るようだ。強いメスだったため、周りの個体は援助しなかった。弱い個体の場合は周りが助ける。

→集団への帰属意識というよりは、「メス」であるという意識もあったのではないか。集団が異なるメス同士でもオスに対して連合を組んだりする。帰属意識はいろいろあり、群れだけを帰属するものと考えなくてもよい。

●ボノボでは、メスは攻撃性とは違ったところで優位性を保っているのか。

→ボノボのメスはオスより体は小さい。集団間のオスとメスの1対1では、メスはオスに負ける。メス同士が連帯してオスを攻撃することで、オスはその後メスを攻撃しなくなる。むしろ、メスはオスに対する攻撃をもって、「オスに攻撃されない」という平和を保っている。そのため、メス同士は連帯する必要がある、結果としてメス間関係は親和的になっている。

### <連帯について>

●「連帯」とはなんだろうというのは気になる。「毛づくろいが多いと連帯している」というのはどうか。毛づくろいという一つの行動から、連帯という上位概念を語るのは難しい。

→人間社会では共同組合のようなもの場合、単にまとまるだけでなく、価値の結合様式のようなものがある。

→土地に関するポリティクスでは、利益によりそのときどきで連帯(alliance)の組み方がかわる。アクターネットワーク理論では、どれだけ長い連鎖をつくるかが力の強度と

関連している。非人間的要素との関係で、集団の在り方が規定されており、それは常に変化している。漠然と連帯や連携という言葉を使用するより、具体的に主体と客体のあいだで、モノと人の連鎖がどのように生じているのか、そういった部分を分析的に分解してとらえていくのが大事なのではないか。

(以上)